東京新聞
2013年（平成25年）3月18日（月曜日）　12版　4

東北復興日記 31

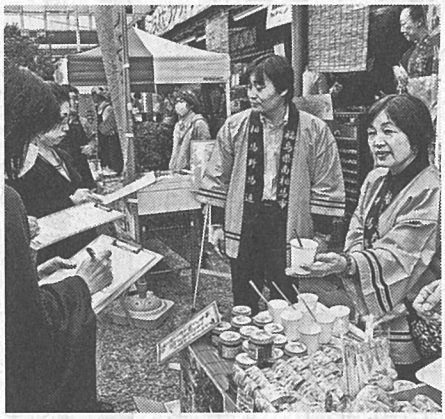
特産品に温かい言葉

花と希望を育てる会代表
高村美春さん

三月五、六日と「南相馬復興大学」報告会および青空市への参加のため、東京に向かいました。南相馬からは関係者二十人が、首都圏からは七十人余が参加。交流会でも新しい出会いがたくさんあり、心からうれしく思います。

日本人は大みそかや年度末など区切りを尊びます。あれから二年。被災地に住む私たちにとっての区切りは三月十一日となりました。やっと二年…まだ二年…もう二年と、その時間の流れはさまざまです。そして三回忌を迎える方々が大勢いらっしゃいます。まだ心の区切りができない方もおられます。

それでも「前を向いていこう」という二十人が、ちよだプラットフォームスクウェアで開かれた「青空市」にて地元の特産品を販売＝写真。風評被害の現実を受け止め、かつ南相馬に新しい特産を！と動きだす一歩となりました。「買ってもらえるのか」「南相馬から来たと言うことが怖い」と思っていましたが、それは取り越し苦労でした。誰からも「放射能は？」「こんな物いらない」など否定的な言葉を言われることはありませんでした。むしろ「どんどんアピールしてください」と温かい言葉をいただきました。お越しくださった皆さま本当にありがとうございました。



販売したものに鹿島区「若松味噌醤油店」のおみそとしょうゆもありました。今なお二歳になる娘さんと奥さまは避難したままです。

新しい特産品として鹿島区四季工房「柚子の甘露煮」を作られたお母さん。一度も避難せず残った人たちにお菓子を作り続けた原町区「松屋」のお父さん。再生可能エネルギーで未来をつくる「えこ・えね」の方たち。どんなに時間がたっても震災を風化させてはいけない。ですが風評はもう要りません。これからです。三年目を迎えた福島で心穏やかに過ごせるよう願ってやみません。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。